

## ご当地デザインの新展開—「佐世保スタイルプロジェクト」の事例—

尹 奎英

### はじめに

平成 29 年 6 月 30 日（金）、名古屋市立大学北千種キャンパスにて、「ご当地デザインの新展開」と題して講演会が行われた。長崎県立大学地域創造学部・教授の車（チャ）相龍（サンリョン）先生をお招きして、佐世保スタイルプロジェクトの事例を中心に講演をしていただいた。参加者は大学院生や学部生を含む計 15 名が聴講した。

車先生は、2005 年に九州大学大学院・地域計画専攻で学位を取得後、同大学大学院比較社会文化学府の特別研究員、九州国際大学経済学部・講師、長崎県立大学経済学部・講師を経て、2015 年から現在の長崎県立大学に在職されている。

### 講演概要

タイトルにあるとおり、ご当地デザインに関する最新の動向を紹介いただいた。最近、「ご当地ブーム」ともいえるほど、ご当地性にこだわったものが世間の注目を浴びつつ、地方創生の文脈から大いに期待されている。デザイン分野においてもご当地ものと名乗るものはある。ただし、これまでのご当地デザインとは、デザインの素材（materials）として「ご当地（here/local）」のワードやキャラクター、またはシンボルに特化したものではあるものの、その業（works）のほとんどは外注となり、そういう実態からいえばほぼ「彼の地（there/national）」のものと言っても過言ではないと車先生は説く。

その主な理由として、20 世紀後半からデザインにおける見栄えの良さが重視され、その表現力を支える高度の構成手法（configure method）の駆使能力を物差しとした専門性を持つ作家の希少性、さらには偏在性が挙げられた。

ところが、ICT 技術の目まぐるしい進歩に伴い、高度の構成手法を専有することで守られてきた「専門性のお城」は崩れかけているという。それによって例の希少性かつ偏在性は十分克服可能な事柄になり、ご当地デザインの業のほとんどを今までのようにご当地の外に出し続ける主な理由ではなくなっているという。

地方創生の要は「業を創ること（work creation）」であり、デザインは「創るのが業（creative work）」である。「佐世保スタイルプロジェクト」は、彼の地のものになっ



図1 佐世保プロジェクトの紹介

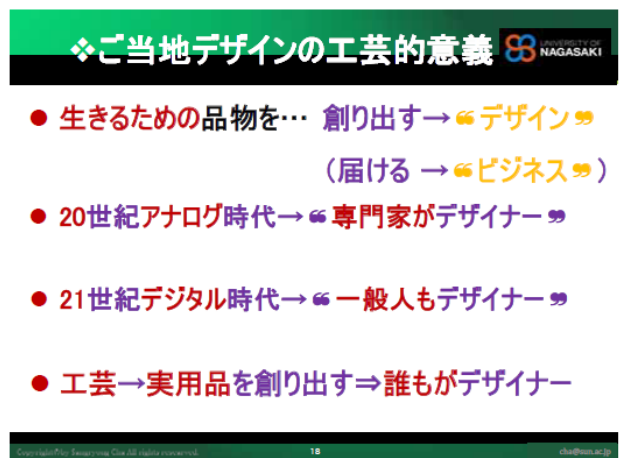


図2 ご当地デザインの工芸的意味

てきたデザインの創る業をご当地のものとするこゝで、新しい業を創り出そうとする興味深い事例であると紹介された。これらの事例を通じて、ご当地デザインの工芸的な意義を、とりわけ柳宗悦以来の民芸運動の伝統に鑑み、考える材料を示してもらった。

### おわりに

アナログ時代からデジタル時代に代わって、高度なスキルを持たなくてもデザイナーの業が実現できるようになった。これをうけて、ローカルで希少な事柄がフラットな価値観の中でどう生かさせていけるか、また、アイデアさえあれば誰にでもプロデューサーになれる時代の到来を目の当たりにして、デザイナーを目指す我々に考え深い課題を投げかける貴重な講演であった。

平成 30 年 2 月 17 日



図 3 講演時の様子